

絵を描くムーミンママ

トーベ・ヤンソン『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』における女性の自己表現

1. 発表の経緯

- (1) トーベ・ヤンソン生誕100年
- (2) 論考「北の孤島の家族の形」

2. 『ムーミン』基礎情報

- (1) 成立 (2) 先行研究 (3) 問題提起

3. 絵を描くムーミンママ

- (1) ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』との比較
- (2) 絵を描くことを放棄するムーミンママ、シグネ・ハマルステン＝ヤンソン、トーベ・ヤンソン
- (3) 再度の問題提起

日本比較文学会東京支部例会
1月24日 於：日本女子大学
発表者：中丸禎子

2014年＝トーベ・ヤンソン生誕100年 さまざまな特集



❄ 評伝の翻訳

- ボエル・ウェスティン『トーベ・ヤンソン—仕事、愛、ムーミン—』、畑中麻紀・森下圭子共訳、講談社、2014
- トウーラ・カルヤライネン『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』、セルボ貴子・五十嵐淳訳、河出書房新社、2014

❄ 2つの展覧会

- 「トーベ・ヤンソン生誕100周年記念 MOOMIN! ムーミン展」
- 「生誕100年 トーベ・ヤンソン展～ムーミンと生きる」

❄ 企業とのタイアップ:ユニクロ、グラニフ、Afternoon Teaなど

❄ 雑誌での特集

- キャラクター:『MOE』(1月号・12月号・公式ガイドブック)
- デザイン:『美術手帖』11月号、『郵趣』8月号
- 生き方:『ダ・ヴィンチ』11月号、『FRaU』2015年1月号

2014年＝トーベ・ヤンソン生誕100年 さまざまな特集

❄️『ユリイカ 特集＝ムーミンとトーベ・ヤンソン』

❄️【インタビュー】

リーッカ・タンネル「最後にはじめた新しいこと トーベとトゥーリッキの共同作業」(聞き手＝中丸禎子 通訳＝森下圭子)

❄️【トーベ・ヤンソンの姿】

中丸禎子「北の孤島の家族の形 海、自分だけの部屋、モラン」

【資料】

中丸禎子「トーベ・ヤンソン年表」「トーベ・ヤンソン著作リスト」

《参考》

❄️現在のフィンランドの公用語は、フィンランド語とスウェーデン語

❄️スウェーデン語が母語のフィンランド人＝フィンランド・スウェーデン人」
(Finlandssvenskar / 一般的な訳は「スウェーデン語系フィンランド人」)

❄️ヤンソンは、フィンランド・スウェーデン人＝母語はスウェーデン語、
『ムーミン』はスウェーデン語で執筆

論考「北の孤島の家族の形 海、自分だけの部屋、モラン」

※ テーマ:「楽しいムーミン一家」像批判

[対象作品]小説版第8作『パパと海』(『ムーミンパパ海へ行く』)

※ ムーミン一家がムーミン谷を捨て、孤島に移住:ムーミン谷がムーミン一家を中心とする親密なコミュニティでなくなる

※ 移住したムーミン一家は、離散の危機を迎える

⇒論考:それぞれの人物のアイデンティティとジェンダーとの対峙を論じる

- ムーミンパパ:「父親らしさ」「男らしさ」(比較:ヘミングウェイ『老人と海』)
- ムーミンママ:家事の放棄+絵画→女性の自己表現(比較:ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』)
- ムーミントロール:恋愛、失恋、自立
- ミイ:ムーミン一家の養女として共に移住(論考では論じず)

⇒本発表では、ムーミンママをウルフ『灯台へ』におけるラムジー夫人・リリーと比較し、「女性の自己表現」を論じる

先行研究

日本の「ムーミン」受容

小説『ムーミン』全9作の完訳(1965~1999)

➤ スウェーデン語からの直訳

❄ アニメ『ムーミン』(1969年版・72年版)

➤ 1969年10月5日放映開始(『サザエさん』放映開始と同日)

➤ 企画:瑞鷹エンタープライズ 制作:東京ムービー、虫プロダクション

➤ オープニングテーマ「ムーミンのテーマ」:(作詞)井上ひさし作詞、(作曲)宇野誠一郎、(歌)藤田淑子歌

➤ 「子どもにふさわしくない」劇画もしくは暴力的なアニメに対し、家族で安心して見られる作品として人気、文部省の推薦

➤ 「カルピスマんが劇場」(のちの「世界名作劇場」)枠の第二作目(第一作目は手塚治虫原作『どろろ』)。以降、1996年まで、同枠で「ヨーロッパの児童文学を原作としたファミリー向けアニメ」を放映

❄ アニメ『楽しいムーミン一家』・『楽しいムーミン一家 冒険日記』(1990年)

➤ トーベ・ヤンソンと弟のラルス・ヤンソンが監修

❄ 「仲の良いほのぼのの家族とゆかいな仲間たち」というムーミンのイメージ

日本の先行研究(1)

- ❄️ 高橋静男(大阪府立国際児童文学館(1984年開館)専門研究員)
 - 1984年9月ゼミ形式の「ムーミン童話」講座を開講
 - 『ムーミン童話の百科事典』:原文情報・誤訳の指摘・作品解釈・背景の説明、本格的なテキスト分析
- ✂️ 『ムーミン』を「ひとりぼっちのひとのための本」と位置づけ、「ただ楽しい」「荒唐無稽」「子どもだまし」のイメージを批判
- ✂️ 北欧のヤンソン研究開始(1980年代)とほぼ同時期に開始
- ❄️ 富原真弓(聖心女子大学教授・シモーヌ・ヴェイク研究)
 - 『ムーミン』以外のヤンソンの小説の翻訳(筑摩書房「トーベ・ヤンソン・コレクション」)
 - 『ムーミン・コミックス』の翻訳
 - 『トーヴェ・ヤンソンとガルムの世界』:風刺画家としてのヤンソンを紹介
- ✂️ 小説以外の『ムーミン』と『ムーミン』以外の作品に焦点を当て、ヤンソンの創作活動のクロスジャンル性を提示
- ✂️ ヤンソンの母で挿絵画家のシグネ・ハマルステン=ヤンソンを日本で初めてまとまった形で紹介

日本の先行研究(2)

❄ スウェーデン・フィンランドとほぼ時期に、ヤンソンを「文学作品」として研究

➤ 「楽しい」だけのイメージを批判

❄ ヤンソンの家族との葛藤やセクシュアリティ、社会批判には触れない

➤ ヤンソンの母シグネ

💧 芸術家を志してパリに留学し、のちにヤンソンの父となるヴィクトル・ヤンソンと結婚

💧 家計を支えるため、芸術家になることを諦め、本の挿絵や切手・証券などのデザインをする商業画家に転身

💧 収入の少ない彫刻家の夫に代わって一家の生計を担いつつ、夫の彫刻制作をアシストし、家事労働と育児を全て一人でこなした

💧 ヴィクトル・ヤンソンは彫刻家として大成したが、シグネは無名

💧 ヤンソンの周囲の多くの女性芸術家が、男性芸術家と結婚することで夫の陰に追いやられた

➤ 20世紀前半に戦争を繰り返したフィンランド

💧 「女性は兵士を産むための存在」

✍ 結婚・妊娠・出産に対して懐疑的

日本の先行研究(3)

ヤンソンの家族との葛藤やセクシュアリティには触れない

ヤンソンの交際相手

- ♣ 男性画家サム・ヴァンニ(ユダヤ系)
- ♣ 男性画家タピオ・タピオヴァーラ(左翼)
- ♣ 男性ジャーナリスト・政治家アトス・ヴィルタネン(左翼): 婚姻関係を結ばず同棲、二度婚約し二度とも解消
⇒ 交際をめぐって親ドイツ・反ユダヤの父と衝突
- ♣ 女性演出家ヴィヴィカ・バンドラー: 1946年に知り合う。ヤンソンが初めて交際した女性
- ♣ 女性グラフィック・アーティスト トゥーリッキ・ピエテイラ: 1955年に知り合い、生涯のパートナーとなる
⇒ ~1945年: ドイツで同性愛者の強制収容・断種・安楽死
~1971年: フィンランドでは同性愛が法律で禁止、81年まで「病气」

ヤンソンの家族関係・人間関係のあり方は、それ自体が同時代のフィンランドに対する問題提起

北欧の先行研究(1)

ボエル・ウェスティン『トーベ・ヤンソン 言葉、絵、生』

Boel Westin: Tove Jansson. Ord, bild, liv. Stockholm, 2007

スウェーデンの文学研究者ボエル・ウェスティン

- 近代文学(アウグスト・ストリンドベルイ)、児童文学
- 博士論文『谷の家族 トーベ・ヤンソンのムーミン世界』(1988)
- ヤンソンから草稿や手紙を含む私的文書の閲覧を最初に許可された

【引用1】

トーベ・ヤンソンは優美な自然児、フィンランド湾の島に不意に現れた、輝きのうちに文章を書くムーミンママに変化した画家、さらなる野心を持つことなく作家になったアーティストとして描写される。彼女は、銀行、金銭、ビジネスの交渉に関する現実的な意識を持たない無邪気なムーミントロールとして描写される。これ以上の誤りはない。このような考えは、薄っぺらいロマンチズム(神話を作るための必然)であり、高度に意識的なアーティストとの関連はきわめて少ない。彼女は15歳の年からずっとハードな仕事をこなし、ローティーンの頃から出版のために物語を書き、1950年代までムーミントロールと絵に関するすべての交渉を自分自身でしていた。ムーミントロールのマーケティングについても手紙の中で熟慮している。二冊本を出しただけの、1950年ごろのことだ。(Westin (2007), s. 31/p. 28-29/29頁)

📄 「お金を稼ぐヤンソン」像の提示

先行研究の日本語訳と問題提起

※ 日本語訳の問題点

- ▶ 原題にはない「ムーミン」をタイトルに入れる
⇒ 原著が脱却しようとしている「ムーミン作者」のイメージに依拠
- ▶ 誤訳や遺漏が散見

※ 日本語訳の意義

- ▶ 膨大な私的資料(手紙・日記)を駆使した新しいヤンソン像の提示

※ 評伝(原典)の問題点

- ▶ ヤンソンへの批判が少ない(『ムーミン』のジェンダー的平等を強調)

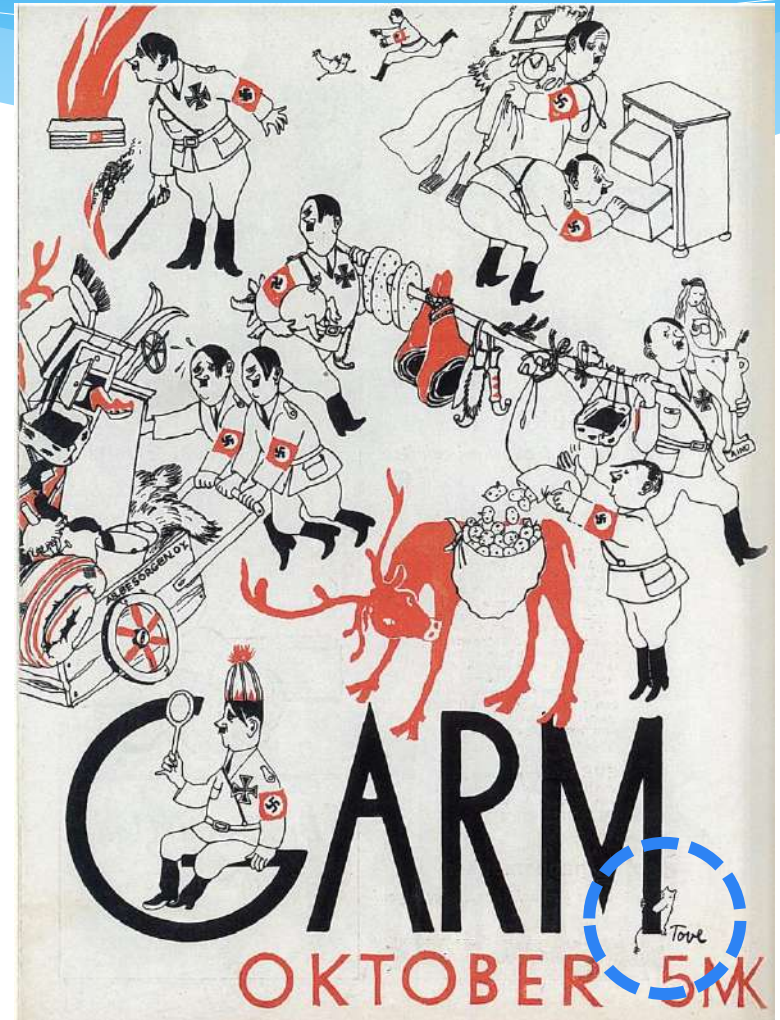
※ 実際の『ムーミン』

- ▶ 両親の性的不平等・家族制度への疑問とは裏腹に、「幸せなムーミン一家」というステレオタイプ的な家族イメージ
- ▶ シリーズ後半で家族イメージを壊す可能性を示しながら、最終的にはムーミンママとムーミンパパのジェンダーを保持

✂ 「金銭のために労働する」「画家」ヤンソンを踏まえ、「ムーミン」家族を批判

ムーミンの媒体：雑誌『ガルム』

- ❄️ 1923年に創刊された風刺雑誌。主な読者はフィンランドのスウェーデン語話者とスウェーデン人。
- ❄️ 「ガルム」は北欧神話に登場する地獄の番犬。
- ❄️ 純正フィン主義(スウェーデン語排斥)運動、禁酒法、ナチズム・スターリニズムなどを風刺。
- ❄️ シグネ・ハンマルステン=ヤンソンが看板画家として活躍。
- ❄️ 1929年以降、ヤンソンが母の仕事を引き継ぐ。
- ❄️ 1930年代にムーミン(当時の呼び名は「スノーク」)が登場



ムーミンの媒体：小説（全9冊）

	原作（スウェーデン語）			英語訳		日本語訳	
	出版年	タイトル	意味	出版年	タイトル（訳者）	出版年	タイトル（訳者）
1	1945	Småtrollen och den stora översvämningen	小さいトロールたちと大きな洪水	2005	The Moomins and the Great Flood (David McDuff)	1999	小さなトロールと大きな洪水（富原真弓）
2	1946	Kometen kommer*	彗星が来る	1951	Comet in Moominland (Elizabeth Portch)	1969	ムーミン谷の彗星（下村隆一）
3	1948	Trollkarlens hatt**	魔人のシルクハット	1950	Finn family Moomintroll (Elizabeth Portch)	1965	たのしいムーミン一家（山室静）
4	1950	Muminpappans memoarer***	ムーミンパパの回顧録	1952	The exploits of Moominpappa, described by himself(Thomas Warburton)	1969	ムーミンパパの思い出（小野寺百合子）
5	1954	Farlig midsommar	危険な夏至	1955	Midsummer Madness (Thomas Warburton)	1968	ムーミン谷の夏まつり（下村隆一）
6	1957	Trollvinter	トロールの冬	1958	Moominland Midwinter (Thomas Warburton)	1968	ムーミン谷の冬（山室静）
7	1962	Det osynliga barnet (novellsamling)	見えない子ども（短編集）	1963	Tales from Moominvalley (Thomas Warburton)	1968	ムーミン谷の仲間たち（山室静）
8	1965	Pappan och havet	パパと海	1971	Moominpappa at sea (Kingsley Hart)	1968	ムーミンパパ海へ行く（小野寺百合子）
9	1970	Sent i november	十一月の終わり	1971	Moominvalley in November	1970	ムーミン谷の十一月（鈴

ムーミンの媒体：ムーミン・コミックス パパとママのジェンダー

- ❄ 第3作の英語訳がイギリスで人気
 - ❄ 1954年、イギリスの日刊紙『イヴニング・ニュース』で、漫画の連載開始（7年契約／弟ラーシュが英語訳を担当）
 - ❄ 半年後にスウェーデンとフィンランドでも連載開始。ヨーロッパ各国・世界の英語圏で広く連載される1957年からラーシュと共同執筆。1959年にトーベの契約は終了。ラーシュによる単独執筆が1975年まで続く。
 - ❄ 1969年放映開始の日本のアニメ『ムーミン』は、小説版とコミックス版を原作とする
 - ❄ ムーミン家族の身体には性差がない
 - 子どもであるムーミンは体が小さいが、パパとママは大きさも色も同じ
 - 小説版初期の視覚的な違いはママのハンドバッグのみ
 - ❄ ムーミン・コミックスでは、パパにシルクハット、ママにエプロンを着ける
 - 『イヴニング・ニュース』編集者の「見分けがつきにくい」という指摘
 - 小説版の挿絵でも踏襲
- ⇒ パパが一家の頭脳、ママが家事労働を担う、一家の性役割が確定

「ムーミン一家」イメージの揺らぎ

※ 第6作『トロールの冬』:小説『ムーミン』シリーズの転換点

- ムーミン族は冬眠⇒～第5作「夏の世界」
- 第6作:ムーミントロールが冬眠から目覚める
- 初登場のトゥーティッキ(邦訳では「おしゃまん」)、冬眠から目覚めたミイとともに極夜を生き延びる

※ 第6作～第9作「冬の世界」

- 生きることの厳しさ、老い、死、孤独、葛藤
- 第7作『見えない子ども』(短編集):短編の主人公たちのアイデンティティの危機
- 第8作『パパと海』:ムーミン一家が、ムーミン谷を離れ絶海の孤島に移住⇒ムーミン谷が「ムーミン一家のコミュニティ」でなくなる
- 第9作『十一月の終わり』:一家のいないムーミン谷を訪れた者たちを通じて、一家の不在が描かれる

第8作『パパと海』

1965年刊。ヤンソンは「大人向け」の本として刊行することを希望するが、出版社は従来と同じ「児童書」として刊行

【概要】

- ❄ ムーミンパパとムーミンママの夫婦の危機、家族の危機、それぞれのアイデンティティとジェンダーの模索を描く
- ❄ パパの「父親らしさ」探究（比較：ヘミングウェイ『老人と海』）
 - 冒頭で、自身が父親としての機能を果たしていないと思い至り、一家を引き連れてムーミン谷を離れ、石と岩だらけの離れ小島に移住
 - シルクハットを脱ぎ、捨てられた灯台に置かれていた灯台守の帽子をかぶる
 - はじめて家族のために働くが、失敗
- ❄ ムーミンの自立
 - 初恋と失恋
 - 家を出ていく

第8作『パパと海』

【概要(続き)】

※ ムーミンママ

- 家事を放棄し、絵を描く

※ ミイ

- 育児放棄され、ムーミン一家の養子となるが、唯一アイデンティティの危機は迎えず、まったく変化しない

【背景】

※ 1958年に父のヴィクトル・ヤンソンが死去

※ 1965年にフィンランド湾の孤島クルーヴハルを借り受ける。以後、毎年夏の4～5か月を、クルーヴハルでトウーリッキ・ピエティラと過ごす

- 作品の舞台となる島はクルーヴハルがモデル

※ 第1作が刊行された1945年に比べ、核家族化が進行

⇒ ムーミン一家も「両親と二人の子ども」(ミイと養子縁組)の核家族として描かれる

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』

ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』とは

* ヴァージニア・ウルフ(1882～1941)

- 「女性が小説を書こうとするなら、お金と自分自身の部屋を持たねばならない」
- ヤンソンの母シグネとの共通点
 - 💧 同い年
 - 💧 貧しい同業者(作家)と結婚
- トーベ・ヤンソンとの共通点
 - 💧 父は偉大な同業者(作家)
 - 💧 バイセクシュアル

* ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』／Virginia Woolf: *To the Lighthouse*, 1927

- ウルフの代表作
- 人の世話をするのが好きな理想的な主婦ラムジー夫人と、夫人に魅力と反感を覚える独身の女性画家リリー・ブリスコウ、夫人の夫・8人の子どもたち(特に末の男女2人)の物語

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』 先行研究による指摘

カルヤライネン：ヤンソンが1944年から死ぬまで使ったアトリエを重視

【引用3】

自分だけのアトリエはトーベにとって自由のシンボルであり、ヴァージニア・ウルフの自分だけの部屋のように、女性が創作をすることができ、十分に自立を守ることができる場所である。アトリエはいつであろうと、誰のためであろうと、彼女が簡単に手放すことのできない場所だった。彼女にとってそこは、この世界で可能な限りの自由を保障した。どのような愛も、どのようなパートナー関係も彼女に自分自身の仕事場を手放させることはできなかったらう。最後の最後まで、仕事は彼女にとって自由と真の実存を意味していた。(Karjalainen, s. 131/157頁)

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』 先行研究による指摘

ウェスティン:ヤンソンが幼いころから灯台を好んでいたこと、灯台や嵐に関する蔵書が多いことを指摘

【引用4】

『パパと海』によって、トーベは、エドガー・アラン・ポー、ジュール・ヴェルヌ、アルヴィド・メルネ、ヤコブ・パルダン・メラー、ヴァージニア・ウルフとともに、伝統的な灯台物語に連なった。灯台へ (To the Lighthouseはまさにウルフの有名な小説のタイトルである) の引力は、ムーミンパパとウルフのラムジー一家における父親双方にとって磁力を持つが、直接的なつながりは二つのテキストの間にはない——それに反して、両者は灯台の象徴的意味への同じ情熱を共有している。(Westin, s. 388/ p. 377/ 467頁)

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』 共通点

- ※ 「灯台」というモチーフ ※クルーヴハルには灯台はない
- ※ 島の地形の類似性：中央に海が入り込むくぼみ、両側に険しい崖
- ※ 家族構成
 - 気難しい哲学者の夫
 - 理想的な専業主婦である妻
 - 男女二人の子ども ※『パパと海』：ムーミンとミイ(養子)
『灯台へ』：8人の子どものうち、末のキャムとジェイムズが中心
- ※ ラムジー夫人とムーミンママ
 - 人の世話を焼くのが好き
 - 気難しい夫をうまくなだめられる善き妻
 - 思考中心の夫と対照的に行動的
 - 子どもたちに信頼される良き母
 - 小さなバッグをいつも自分で持つようにしている

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』 共通点

❄ 「絵」と「女性の自己表現」というモチーフ

➤ リリー・ブリスコウ

- 💧 ラムジー夫人の絵を描こうとする
- 💧 「女には描けない、女には書けない」という言葉に抗う
- 💧 作品の最後に、キャンバスに絵筆でまっすぐな線を引く
⇒ 模索の末に自己表現の手段を手に入れる

➤ ムーミンママ

- 💧 生きがいであった「人の世話」ができなくなり、ムーミン谷の花壇から持ってきたバラの移植に失敗したため、することがなくなる
- 💧 するべき家事も放棄する

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』 共通点

❄ 「絵」と「女性の自己表現」というモチーフ

➤ ムーミンママ

💧 海岸に流れ着いた流木を拾う(掃除)

💧 のこぎりで流木を切り、薪を作る⇒「自分だけの部屋」

【引用5】

ママは穏やかな灰色の天気の日、のこぎりを引き、のこぎりを引きました。彼女は切った木を全く同じ長さになるように計り、自分の周りに半円形になるようにきちんと並べました。薪の壁はどんどん高くなり、最後には、限りない安心感を与える**自分だけの小さな部屋**にママは立ってのこぎりを引きました。(Pappan och havet, s. 117 / 173頁)

💧 はじめて夫の要求を拒否

【引用6】

「これはわたしのよ。わたしも遊びたいの」(ibid., s.118 / 175頁)

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』

※ 『灯台へ』と『パパと海』の共通点

▶ 「絵」と「女性の自己表現」というモチーフ

● ムーミンママ

☀ 壁画：ムーミン谷のバラ、ムーミン谷の家（海とボートは上手く描けない）、ムーミン谷の庭

☀ 絵に描いた庭の中に逃げ込む

☀ 家族から隠れられるよう、自分の姿をたくさん描く

● ムーミンママ＝リリー・ブリスコウを目指すラムジー夫人

＝妻・母・画家であったシグネ・ハマルステン＝ヤンソン

※ Signe Hammarsten-Jansson(1882-19)

▶ 1スウェーデンで牧師の娘として生まれる。

▶ スウェーデン初のガールスカウトを設立、乗馬・射撃が得意

▶ 1910年、彫刻家を志してパリに留学し、ヴィクトル・ヤンソンと結婚

▶ 生計を立てるため、商業アートを広く手掛ける

▶ 1914年にトーベ、1920年にペール・ウーロフ、26年にラーシュ誕生

『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』

※ シグネ・ハマルステン＝ヤンソン

- 1958年、夫が死去
- 1962年、造幣局(切手・証券デザイン)退職
- 1970年、没

【引用7】

父の死後、トーベは、彼が母にとってどれほど大きな意味を持っていたのか、驚きを以て気づいた。トーベは生涯ずっと彼女の母を父のくびきから救い出せればと願ってきた。彼女は母を連れてより良い世界、少なくとも、さまざまな色があり、ぬくもりがあり、どんなときにも大きな要求をする男がいない国へ、逃げ出そうと計画した。トーベはトゥーリッキへの手紙にこう書いた。「ハムは恐ろしく深刻な状態で、[...]彼らはわたしが理解できたよりも、ずっとずっと愛しあっていたに違いありません。

(Karjalainen, s.217 / 261頁)

絵画とムーミン谷を放棄するムーミンママ

【引用8】

それじゃ、家へ帰ってコーヒーを飲みましょうよ。

パパは彼女が家へと言い、灯台へとは言わなかったことに気づきました。それは初めてのことでした。(Pappan och havet, s. 179/264)

【引用9】

彼女はその日、絵を描かず、花の支えを削って作ったり、たんすを片づけたりしました。灯台守の引き出しもです。〔中略〕

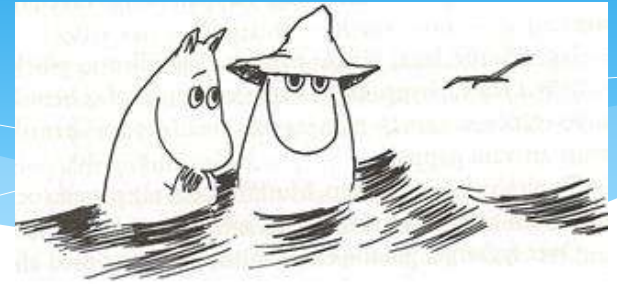
ママは彼らをちらりと見て、壁画のところへ行きました。彼女は前足をりんごの木に押しつけました。何も起こりませんでした。それはただの壁でした、ごくありきたりの漆喰の壁でした。

わたしはただ知りたかったの、とママは思いました。そしてその通りだった。もちろんもう、この中には入れないわ、家は恋しくない。(Ibid. s. 194/285-286頁)

絵画とムーミン谷を放棄するムーミンママ

【比較】ムーミンパパ

- ※ シルクハットを脱いで灯台守の帽子をかぶる
- ※ 最後にまたシルクハットをかぶる
- ※ 自己実現に成功



【引用10】『パパと海』の最後

彼は水際までやってきて砂浜に立ちました。そこでは彼の海が波また波を寄せては返し、ざーっと一気に押し寄せ、静かになり、荒々しくなりました。パパはかれのすべての思考を平らげ、ただ、生きていました、しっぽの先から耳まで。

彼の海の方を見るために振り返ったとき、彼は白い光が海の彼方へ伸びているのを見ました、その光は、からっぽの水平線を目指して手探りで進み、長く規則正しい波となってまた戻ってきました。

灯台に明かりがつかしました。(Ibid., s. 208/309-310頁)

絵画とムーミン谷を放棄するムーミンママ

【比較】リリー・ブリスコウ

【引用¹¹】『灯台へ』の最後

彼女は階段を見た; からっぽだ; 彼女はキャンバスを見た; ぼやけている。突然強烈に、まるで一瞬のうちにそれをはっきりと見たように、彼女はそこに一本の線を描いた、真ん中にだ。やったわ; 終わったわ。そう、彼女は考えた、極度の疲労の中で絵筆を置きながら、わたしはわたしのヴィジョンを手に入れた。(To the Lighthouse, p. 151/406頁)

- ❄ 「からっぽの」場所に一本の線をひくリリー・ブリスコウ
- ❄ 『パパと海』の最後の場面(「からっぽの水平線」を照らす灯台の光を見るパパ)との類似性
 - からっぽの場所に一本の道ができる
 - 人物がそのことに満足する

絵画とムーミン谷を放棄するムーミンママ

【引用12】ムーミンママが登場する最後の場面

わたしはここにちょっと絵を描いたんです、ママは恥ずかしそうに述べました。

見てますよ、灯台守は言いました。内陸の景色。だが気分転換としてならすばらしいわい。そして本当によくなされた。他の壁には何をお描きになるのですか〔引用者註：未来形〕？

地図を考えました〔引用者註：過去完了〕、ママは言いました。島と危険な暗礁全部の注意書きと、そしておそらく海の深さも。わたしの夫は海の深さを測るのが得意なのです。〔中略〕

シーツも洗っておきましたよ、ママは言いました。とてもきれいだったんですけど。ベッドはもとの場所にありますから。(Pappan och havet, s. 206-207/306-308頁)

- ※ ムーミン谷を放棄し、島の地図を描く
 - 過去完了：描こうと思っていたが描かない？
 - 描くとしても夫のアシスト
- ※ シーツの洗濯(他人の世話)

絵画とムーミン谷を放棄するムーミンママ

- ※ ママの絵：花⇔海＝男らしさの象徴と向き合うパパ
自分 男性（パパ、ムーミン）は描かない
⇒ 女性は描かれる客体のまま

※ 木のモチーフ

【引用13】リリーの自立の象徴

彼女はテーブルクロスを見て、不意にその木を真ん中に移そう、誰とも結婚する必要などないのだと思いつき、大きな喜びを感じた。(To the Lighthouse, p. 128/340頁)

【引用14】ママが寄りかかるもの

家に帰りたいわ...この恐ろしいからっぽの島と意地悪な海を出て、きっと家へ...彼女は自分のりんごの木を抱いて、目をつぶりました。木の肌はざらざらして暖かでした。海の音が消えました。ママは自分の果樹園に入っていました。〔中略〕ママはりんごの木の後ろに立って彼らがお茶の用意をするのを見ていました。〔中略〕

お湯が沸くころ、ママは頭をりんごの木に持たせかけてぐっすりと眠っていました。(Pappan och Havet, s. 151-152/223-224頁)

絵画を諦めるトーベ・ヤンソン

❖ 生活のために「芸術」を諦めるヤンソン

- 留学を途中で切り上げて母の仕事を手伝う
- 「売れる本」ムーミン：読者サービスとしての「幸せな幼少期」
- 1960年代に個展をしばしば開催
 - 💧 評判は悪くはないが、賞賛もされない
 - 💧 「ムーミン」に忙殺されて第一戦から長く退く
 - 💧 女性画家・商業画家への偏見
- 1970年代に絵を描く気力が失われる

❖ 商業画家は芸術ではないのか？

- ヤンソンの芸術家としての目標は父ヴィクトル。ヤンソン自身は商業アートを芸術とは見なさなかった

❖ 「自分だけの部屋」でしか絵は描けないのか？

- 交際相手との「共同制作」
 - 💧 サム・ヴァンニ：お互いを描く
 - 💧 アトス・ヴィルタネン：文章を書く＋「ムーミンに登場」

再度の問題提起

※ 「自分だけの部屋」でしか絵は描けないのか？

➤ 交際相手との「共同制作」

◆ ヴィヴィカ・バンドラー：演劇とオペラ+「ムーミン」に登場

※ トゥーリッキ・ピエティラ：立体ムーミン+「ムーミン」に登場「自分たちの部屋」で「お金のため」の芸術活動を通じた自己表現・他者表現

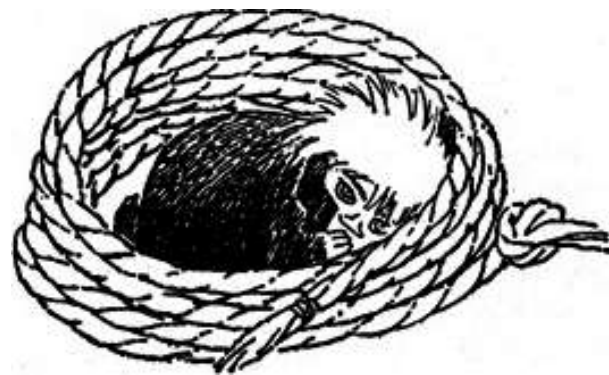
※ 『ムーミン谷の十一月』におけるママの解放

➤ ムーミンママを慕う少年ホムサのトフト

◆ Toft<Tove+顔もヤンソンに似ている

➤ ママのいやしを求めてムーミン谷に来るが、ママはいない

➤ ママの姿を想像するうち、想像が肥大化



再度の問題提起

- 『ムーミン谷の十一月』におけるママの解放
- ムーミンママを慕う少年ホムサのトフト

【引用15】疲れたり、怒ったりするママを認める

それは新しい世界でした。ホムサのトフトはそのための絵も言葉も持っていませんでしたが、必要ありませんでした。ここでは誰も道を作ろうとしなかったし木の下で休みもしませんでした。彼らはただ暗い考えと共に歩き回りました、これは怒りの森でした。彼はすっかり落ち着いてとても生き生きしました。限りなくほっとしながら、ホムサは彼の絵がすべてどのように消えていくかを感じました。谷と幸せな家族についての彼の話は色あせて消えていき、ママも消えて遠くなり、人の姿をしなくなり、彼はもはや彼女がどんなふうに見えていたのかもわかりませんでした。〔中略〕

ここをママは歩いて行ったんだ、疲れたとき、怒っているとき、絶望しているとき、解放されたいとき、あてもなくいつもの影の中をさまよって、深く自分の沈んだ気持ちの中に入り込んで... (Sent i november, s. 168-169/301-302頁)

※ 「木」のもう一つの作用⇒絵や言葉の放棄による自己の解放

まとめ

- ❄️『パパと海』におけるムーミンママ、そのモデルであるシグネ・ハマルステン＝ヤンソン、トーベ・ヤンソンは、『灯台へ』でリリー・ブリスコウが到達した「絵画による女性の自己表現」には失敗する
 - 『パパと海』において、リリーに類する自己実現を達成するのは、ムーミンママではなく、パパである
- ❄️しかし、ヤンソンの人生と『ムーミン谷の十一月』には、ウルフとは違う形の芸術と自己実現の関係の萌芽がある
 - ヤンソンは人生において、「お金のために」「共同制作をする」という形でオリジナリティを発揮し、自己と他者を表現した
 - 『ムーミン谷の十一月』では、言葉と絵を放棄することで自己とムーミンママを解放する可能性を示した
- ❄️ここには「お金と自分だけの部屋」とは違う芸術の可能性がある

参考文献

- ※ Tove Jansson: Pappan och havet. Falun (Alfabeta) 2010
 - 小野寺百合子訳『ムーミンパパ海へ行く』、講談社青い鳥文庫、2012
- ※ Tove Jansson: Sent I november. Falun (Alfabeta) 2010
 - 鈴木徹郎訳『ムーミン谷の十一月』、講談社、1992
- ※ Virginia Woolf: To the Lighthouse. Hertforshire (Wordsworth Classics) 1994
 - 御輿哲也訳『灯台へ』、岩波文庫、2004
- ※ Tuula Karjalainen: Tove Jansson. Tee työtä ja rakasta, Helsinki (Tammi) 2013.
 - スウェーデン語訳 Tuula Karjalainen: Tove Jansson. Arbeta och älska. Översättning av Hanna Lahdenperä. Stockholm (Norstedts) 2013.
- ※ 日本語訳 セルボ貴子・五十嵐淳訳『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』、河出書房新社、2014 Boel Westin: Tove Jansson. Ord, bild, liv. Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 2007.
 - 英語訳 Boel Westin: Tove Jansson. Life, Art, Words. The Aithorised Biograph. Translated by Silvester Mazzarella. London (Sort of Books) 2014
 - 日本語訳 畑中麻紀・森下圭子訳『トーベ・ヤンソン—仕事、愛、ムーミン—』、講談社、2014
- ※ 石野裕子『「大フィンランド」思想の誕生と変遷——叙事詩カレワラと知識人』(岩波書店、2012)
- ※ デイヴィッド・カービー『フィンランドの歴史』(百瀬宏・石野裕子監修、明石書店、2008)
- ※ エレイン・ショウォルター『女性自身の文学 ブロンテからレッシングまで』、川本静子・岡村直美・鷺見八重子・窪田憲子訳、みすず書房、1993
- ※ 高橋静男「ムーミンゼミ」・渡部翠『ムーミン童話の百科事典』(講談社、1996)
- ※ 富原真弓『トーヴェ・ヤンソンとガルムの世界』(青土社、2009)
- ※ 松村一登「フィンランド・フィンランド語のページ」<http://www.kmatsum.info/suomi/> (2014年8月2日閲覧)